

# 九州連合会細胞診研修会（合宿）に関するアンケート結果の総括 および収集された意見に基づく提言

九州連合会教育委員会

## 1. アンケートの目的

日本臨床細胞学会九州連合会が開催している九州細胞診研修会（合宿）については、これまで開催形式や開催時期、日数、プログラム内容が担当県の臨床細胞学会の裁量に委ねられており、それぞれの関係者が非公式に前年の担当県からの引き継ぎを経て、あるいは情報を入手して開催を計画・準備していた。そのため、教育委員会において開催マニュアルを作成し、これを各県の担当者と共有することにより、開催準備と実施を円滑に行うことを目指すこととなったが、その過程において、細胞検査士資格認定試験をめぐる諸事情、研修に参加する受験予定者およびその指導にあたる細胞検査士、医育機関関係者の要請なども把握する必要があると判断されたことから、連合会会員を対象にアンケートを実施して広く意見を収集することにした。調査は2023年11月7日～14日、11月21日～28日の2回にわたって実施し、130名の会員から回答を得た。以下、主な質問事項への回答を総括し、委員会としての提言をまとめる。

## 2. 開催期間、合宿形式について

回答者（130名）の75.4%がマニュアルなどによる開催期間・開催形式を明記することが望ましいとする回答を得た（98名）。そのうち75.5%の回答者が2日の日程が望ましいとしており、3日とする意見は17.3%、1日とする意見は7.1%であった。合宿形式とするか否かについてはあらかじめ取り決めておくとする意見が優勢で、66.9%を占めており（95名）、そのうち合宿廃止を支持する意見が53.7%、継続がよいとする意見が46.3%を占めていた。ただし、合宿形式がよいとする一方で、時代のニーズを反映させることも必要である、宿泊手配は担当県の負担が大きい、宿泊は参加者が手配することが望ましい、などの意見が出されていた。合宿形式の問題として、受講生が望んでいるとは思えない、必ずしも受験生ファーストとなっていない、相部屋であったために睡眠不足で万全の体調で臨めなかった、などの指摘が寄せられていた。

以上より、**開催期間は原則として2日とし、宿泊の手配は受講者自らが行き、夜間のプログラム・懇親会は設定しないが、オプションとして各県が企画することは妨げない**とするのが妥当である。ただし、後述するWEB講義やWEBフォトテストが導入される場合は、開催を二次試験対策として1日にすることも考慮されてよいと考えられる。

## 3. 二次試験への対応について

難易度が高い二次試験に特化したプログラムとするか否かについては、回答者（130名）のうち66.2%が決めておくことが望ましいとしており（93名）、そのうち54.8%が二次試験に特化することを支持しており、45.2%の回答者は一次、二次療法の試験対策とすることが望ましいとしていた。対面での講習会という性格上、既存の解説書、教科書、自学・自

習が可能であるとする意見があるのに対して、鏡検による本番さながらの模擬試験のような内容を期待するとの意見が出されていた。

二次試験への特化については後者がやや多いものの、意見が拮抗していることから、原則としては一次、二次両方を視野に入れるが、前者についてはWEBなどの併存による予習・復習なども適宜導入し、今後は研修会でなければ実施できない鏡検による講習に注力し、2次試験対策に重点を置くことが望ましいと考えられる。なお、日本臨床細胞学会細胞検査士委員会内では一次試験は比較的成績が良好である傾向があるとの認識が共有されている。

#### 4. WEB 講義や WEB フォトテストに導入について

回答者（130名）の66.9%がWEB講義やWEBフォトテストを併用した方がよいとする意見であった。これに関連して、1次試験対策をWEBで代用し、基本的な知識の習得が可能な場を設けることが必要である、研修会自体は2次試験対策とする、という意見も出された。

受講者の負担（時間的・身体的および経済的負担）、研修会を担当する県の負担を考慮した場合、WEBを活用した研修会の効率化は本学会の目指すべき方向であると考えられる。

#### 5. 同定・スクリーニング問題の症例数や時間の設定

回答者（130名）の66.2%があらかじめ決めておくことが望ましいとしていた。特に、二次試験と同様に問題数、時間配分を設定し、本番の試験に合せた形式がよいとする意見が多く出されていた。また、見直しの時間も長めに設けるとよい、実習後に受講者からの質問を個別に受ける場と時間を設定することが重要であるとするコメントが寄せられた。

以上より、二次試験に合せた問題数、時間配分で行うことが望ましいと考えられる。

#### 6. 懇親会・ナイトセミナー・実技のあり方について

回答者（130名）の63.1%があらかじめ決めておくことが望ましいとしており、懇親会については最近の受講者は学習を優先させる傾向がある等の理由から自由参加、実技はWEBあるいは動画でよいとする意見が出された。

懇親会・ナイトセミナーについては前述のように（2.開催期間、合宿形式について）開催を妨げるものではないがオプションとして自由参加の形地とすることが望ましいと考えられる。実技試験については、細胞検査士委員会、試験運営委員会内での議論として、実際にこれを復活させて行うことは試験会場の物理的制約、時間的制約などから困難であるとする意見が優勢で、現時点では復活は予定されていない。その一方で、受験者の手技のレベルが低下していることが懸念されており、かつ施設間格差、技術の違いなどがあり、それをチェックする場がないという問題が指摘されている。そのため、実技についてはWEBなどで動画を用いて自学・自習の機会を提供することは有意義であるものの、必須のプログラムとして位置づける必要はないと考えられる。この点については役員会の意見をうかがいたい。

#### 7. 症例（ガラス標本）の共有化と症例提示講師の人選の基準

決めておくことが望ましいとする回答者（130名）の53.1%で、特に決めなくてもよいとする意見を若干上回っている。標本の共有については教育用セットの準備と更新を行いながら、研修会で使用できるようにする、典型例の標本を数枚ずつ確保して合宿用のティーチングセットを2～3セット作り、年別で使い回す、などの案が出されているほか、開催県のみならず九州・沖縄全体から講師の人選を進めることが必要であるとの意見がある。その一方で、外部への標本の持ち出しのための手続きが煩雑で年々難しくなっているほか、個人情報保護の観点から標本の貸し出し・共有が困難であるとの見解もある。

方向性としては症例（ガラス標本）の共有化は進められるべき出ると考えられるが、連合会全体の取り組みとしてこれを行う必要がある。合せてデジタル画像のアーカイブ化なども視野に入れて準備を進めることが望ましいが、現時点ではこれを積極的に進めることはハードウェアなどの制約のより容易ではない。その一方で、講師の人選については教育委員会としてこれを支援することが可能であると考えられる。また、研修会で提示する症例をリスト化することは標準化という意味において有益であると考えられることからこれを進めることにしたい。

## 8. 合宿試験問題作成の基準と内容チェックシステムの確立

回答者（130名）の70%が合宿試験問題の作成の基準と内容のチェックシステムの確立を支持していた。具体的な意見として、教育・精度保証などの委員会担当者を中心に委員会の下部組織として合宿運営担当委員を配置する案、各県から委員を1人ずつ選出していたでいて試験対策委員会を組織する案、などが示されている。いずれにしても連合会として実施する研修会であり、一定の水準を維持するためには学会としてチェック体制を構築する必要があり、必要であると考えられる。ただし、組織改編が必要となる場合は実施のために準備が必要となるため、教育委員会としてこれを担うという代替案も考えられる。

## 9. データの解析と共有方法の確立（九州連合会へのフィードバックも含めて）

回答者（130名）の75.4%がこれを支持するとの結果が得られた。データの解析は受講生のスキル評価およびそれを向上させるための対策として有効である、研修会で使用する問題・標本が適切であるかどうかを検証するために必要である、とする意見がある一方、機材や解析ソフトウェア、手間と労力を要することから、県単位ではなく連合会でやるべきであるとする意見が出されている。

細胞検査士資格認定試験も動向に合わせて研修会における成績（点数）と合否との関連を解析して研修会の有効性を検証し、適宜改善を行うことは重要であると考えられることから、役員会での議論を経て方向性を出したい。

## 10. 正答率・順位を含めた個人の成績表作成の必要性

作成した方がよいとする回答者が全体（130名）の66.2%であるのに対して、特に決めなくてもよいとする意見が33.8%であった。合否予測にも使用できる、励みになる、モチベーションの向上に寄与する、希望する受講者には成績表を開示したほうがよい、との意見

がある一方で、個人情報法に抵触するという危惧がある、正答率は自分でもわかるため、順位は不要である、順位が上位にある受講者を発表することは不要、などの意見が出されている。

実際の細胞検査士資格認定試験は絶対評価ではなく、合否の基準は毎年代わる可能性があるため、希望者に順位を知らせることは有効であると考えられる。